
魔法少女と殺人鬼

カルピスオレンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女と殺人鬼

【Nコード】

N5380Z

【作者名】

カルピスオレンジ

【あらすじ】

リリカルなのはの世界に戯言シリーズの零崎を突っ込んでみた。ただそれだけ。捻りも何も無い。きつと更新も遅い。それでもいいなら、どうぞ

閑話（前書き）

見切り発車よーい。

気分が乗ったんで連載にしてみた。先の事なんか全く考えてないが、それでも頑張ろうと思ったり

閑話

そこは、何も無い空間。何一つ形あるものは存在せず、ただそこに空っぽの空間があるのみ。

しかし、今はそこに一つの人影があった。

……正確に言えば、この何も無い空間はこの人影を置いたためだけに創造されたものであり、この空間が出来た時点で人影はすでにあつたので『何も無い空間』と表すのは間違いなのだが、誤差の範囲内なので気にせず進めさせてもらう。

人影は、特に何をするでもなく、ぼんやりと周囲を見渡している。性別は男。年齢は二十代前半。気付いたらこの空間にいたという非常識な状況であるにも拘らず、動じた様子も無い。

彼は手の甲でぐしぐしと両目をこすり、

「周りが真つ白すぎて目が痛エ……」
なんともけだるそうに呟いた。

続けて大きく伸びを一つ。白一色の世界のせいであるかどうかも分からない地面を足で叩いて確認してから腰を下ろして胡坐をかく。そして大きなあくび。

「……いやもう少し動じろよ。驚きの声くらい上げてくれよ」
「ん？」

何処からか発せられた声に彼は顔を上げる。きよろきよろと首を振り、影すら見当たらないと分かると探すのを止め、頬杖をついて目を閉じる。

「諦めるのが早すぎるだろう……」
「明らかに男の声だったのに、何でその声の主を探さなきゃいけないんだよ」

呆れたような声とともに周囲から滲み出るように、さっきまで影も形も無かったはずの第二の人影が現れた。

性別は不明。年齢も不明。外見から入手できる情報はほぼ皆無だ

が、白い布一枚しか身にまといつておらず体のラインがある程度分かるのと、声の質から男性ではないかと思われた。

対する彼はいきなり人が現れたのにも関わらず、目を閉じたまま応える。

次に口を開いたのは彼の方だった。

「…それで、何の用だ？」

「うん？何の事だい？」

「とぼけんな。現状を考えてお前が何かしたのは明らかだろ。わざわざダンプカーに轢かれた俺をこんなところに呼び出して何をさせた
い」

「轢かれたのを憶えていたのかい」

「自分から行ったからな」

いやこの場合は逝った、か？とぼやく彼を見て男性はその表情を苦笑いへと変える。その表情が示す感情を男性がその内に抱いているかは不明だが。

「では簡潔に言おう。私は神で、死んだ君をここに呼んだんだ」

「へえ、神様ついていたんだ」

「……………何か他に言うことはないのかい？」

「んー、ないね。強いて言うなら俺はいつ地獄に行くの？」

「おや、自分が天国に行くとは思わないのかい？」

「有り得ないね。世界中の皆が幸せになるくらい有り得ない」

「おいおい、その確率は零を通り越してマイナスじゃないか。少し自分を卑下しすぎだろう」

「仕方ないだろう。それだけの事をしてきたんだから」

「それもそうだね」

ふん、と彼は自嘲するように笑い、ははは、と男性は顔の形を『笑顔』というものに変えた。

続けて、男性は顔の形をぴくりとも動かさず、

「それで、君をここに呼んだ理由、同時に君がダンプカーに轢かれて死ぬことになった原因、あの瞬間君が轢かれそうになった女の子

を助けた理由を聞いてもいいかな？」

「ばっかお前、その子の顔よく見たか？めっちゃ可愛かったんだぜ？そりゃ助けるだろう」

「なるほどね」

得心が行ったとばかりに頷く男性。対して彼は新たに疑問を抱いたらしく、

「いやいや、アンタは納得してるようだけどさ、そのことが一体どういう経路を辿ったらここに呼び出されることになるわけ？」

「うん。その女の子を助けたことによって、君は地獄に墮ちるのを免れたんだよ」

「いやそれはない」

ずばっ、と一刀両断する彼。

「その程度の善行で助かるほど半端な悪事をしてきた覚えはないんだけど」

「それはだね、君は芥川龍之介の『蜘蛛の糸』という作品を読んだことはあるかい？」

「概要だけなら知っている。最近の若者らしく」

「おや、君なら読んでいるものだと思っていたのだがね。まあ知っているならいいんだ。あの中で泥棒の男はほんの気まぐれで蜘蛛一匹を助けただけで極楽へ行く機会を与えられたじゃないか。蜘蛛一匹でチャンスなら、いたいけな少女一人ならもう確定でいいだろう」

「ふーん、そんなもんか」

「そんなもんだよ。神様は不平等に平等だからね」

「平等に不平等、だろ」

そっちの方がいいのかな？男性は首を傾げた。

「まあいいか。そういう訳で、君には生き返ってもらおうよ」

「拒否」

「却下」

唸る彼を見て、男性は面白そうに笑い声を上げる。

「本当は元の世界に戻してあげたいんだけど、君の死体は助けられ

た女の子が一生トラウマを持つほどグチャグチャだから無理なんだよ。仕方がないから別の世界に行かせてあげるね」

「……………」
話についていけないのか、もしくは理解していても諦めたのか、彼は何も言わない。

「何か特典でもつけてあげよう。要望は？」

「…別にいい。死ぬ前に持ってたものをそのままにしてくれれば」

「ああ、君の商売道具だったね。いいだろう。場所は……………ここでもいいか」

確認するように言って一人で頷く。

「それじゃあ行ってもらうけど、何か言いたいことは？」

「…さつさと地獄に行かせてくれ、って言っても、聞いてくれないんだろ？」

「勿論」

楽しげな声が響くと彼の体は光となって白色に溶けるように消え去り、同じくしてその空間も無に還った。

『き……………さい……………起……………くだ……………！』

揺さぶられている。ぼんやりとした思考でそう考えるが、それに気付いたからどうしようとして訳じゃない。体は重いし瞼は固い。起き上がるかどうか脳内で審議したが多数決でこのままということに決定した。

だが、

『起きてください！起きてください！起きて……………！』

俺を揺さぶっている人のものと思われる声があまりにも必死で、無視し続けるのも憚れる。どうしようかと一瞬迷ったが、声質がどう聞いても女性のものだったので眼を開ける事にした。

薄く開いた瞼に真つ先に飛び込んできた景色は天高くそびえる木々。ここはどこかの森の中だろうとなんとなく思った。

眼球を少し下に動かすと、俺の体を動かしていた人の姿が見えた。やっぱり女の子だった。

少女というより幼女といった方が正しいであろう外見。その桃色の髪の上には羽の生えた爬虫類的な生き物が乗っかっていた。気にならないでもないが置いておく。

「ああよかった！気がついたんですね！」

嬉しそうに声を上げる幼女。この喜びっぷりから察するにそれなりの時間俺に呼びかけ続けていたのだろう。

「…心配かけたみたいでゴメンな。お嬢ちゃん、名前は？」

「へ？きゃ、キャラ・ル・ルシエですけど…」

ふむ、外見からも分かるがどう考えても日本人じゃないな。それなのに言葉が分かる。外国語のリーディングにはそこそこ自信があるがヒアリングはボロクソのはず。おまけに場所も全然違う場所になっているし、これはさっきの神だとか別の世界云々は夢ではないらしい。服も変わらんし、持っているものもそうだろう。

そこまで考えて、名前だけ聞いて何も言わないというのは失礼な話だな、と思い。、とりあえずは自己紹介ぐらいしようと思った。

「そうかそうか、キャラちゃんというのか。うん、可愛い名前だね。それじゃあ改めまして、はじめましてキャラちゃん。俺の名前は零崎逆識せいのまきさかして」

しがない『殺人鬼』さ」

プロローグ

「はあ、『さっじんき』…ですか？」

というのが、俺の自己紹介を聞いたキャロちゃんの反応でした。

いや、気持ちは分かる。改めて考えて、自分でもおかしいと思う。なんだよ、しがない殺人鬼って。こんなことを言うなんて、流石の俺もこの状況に少なからず動揺していたということなのだろう。

というか、キャロちゃん。殺人鬼の意味、分かってないんだね。

まあ年端も行かない子どもにそんな物騒な言葉を使った俺が悪いんだろうけど。

結果として、さっきの自己紹介では俺の名前以外何も教えられていないことに気付き、同時に自分がいつまでも地面に寝転がっていることもふと思いつき、さらに若干空腹気味だったことも判明したので、立ち上がって体の調子を確認し、どうやらキャロちゃんもお昼ごはんにするところだったらしいのでご相伴に預かることにした。この森で採ったという木の実を齧りながら会話を交わす。キャロちゃんが倒れている俺を発見したのは偶然らしい。

ある程度の話聞いたところで、今度は俺について、いくつかのことを話した。もちろん、子どもの教育によるしくなくところは全面カット。お陰で要領を得ない話になってしまった。

「……………」

俺の話を聞いて、なにやら思案顔になるキャロちゃん。真面目な空気を醸し出しているところなんんだが、頭の上でフリード（さっき聞いた。キャロちゃんのペットみたいなものらしい）が木の実を啄ばんでいるせいで台無しになっている。

そんなことにも気付かないほど真剣に頭を回転させていたらしいキャロちゃんは、やがて真剣な口調で、

「さかしきさんのお話を聞く限りでは、どうやらさかしきさんのいた世界とこの世界は違うようです。魔法も知らないようですし、多

分さかしきさんは、じげん……じげん……ひよ、ひよ……」

「漂流？」

「そうですね！『じげんひょうりゅうしゃ』です！」

次元漂流者、ね。とりあえず、漢字がわからないなら無理に使う必要は無いと思うよ。

キャロちゃんの言う魔法とやらは、なんでもデバイスとかいう機械を介して発動する、言わば科学技術の延長のようなものらしい。なんとも夢の無い話だ。だが、夢物語みたいな、冗談にしても笑えない能力を持った奴を何人か知っている身としては、そういった理屈めいた部分があつてくれると、受け入れ安くて助かるのだが。

やや多めに分けてくれた木の実の最後の一つを口に放り込み、甘味と酸味を舌の上で感じながら咀嚼し飲み込む。そして、ずっと気になつていた事を訊いてみた。

「キャロちゃん、どうして君みたいな小さい子がこんな森の中にいるんだ？見たところ、少し遠出のお散歩って訳じゃないだろう？」

普段着としてはあまりにもくたびれている外套を纏っているのもそうだし、集めたという木の実も俺に分けても十分全員に行き渡るくらいの量があつた。これはどう考えても普通じゃない。いや、ただ俺が普通じゃないからそう感じられるのかもしれない。しかし、かし、どうもこの件については当たっていたらしく、キャロちゃんの表情が目に見えて悲しげなものになつた。

言い洩るキャロちゃんにしつこく聞き続け、やっとのことで打ち明けてくれた内容はこうだ。

キャロちゃんは竜とともに暮らす少数民族「ル・ルシエ」というところの生まれで、「竜召喚」という希少技能レアスキルの持ち主らしい。幼い頃からその強大な才能の片鱗を見せていたキャロちゃんに対し、部族は「大きすぎる力は災いを呼ぶ」と言つて追放したらしい。

必要最低限の荷物（といつても古びた外套と年季の入った小さいナイフ）を持たされ村の外に放り出されたのが昨日のこと。傍にいたフリードに助けてもらいながらどうにかこうにか生き延びて、そ

して現在に至る、と。

言ってみると随分あっさりとしたものに聞こえるが、正気の沙汰とは思えない。こんな小さい子を、竜とはいえまだ子ども部類のフリードと一緒に追い出すなんて、どうかしてる。

強大な力が、そしてそれをコントロールできないことが、どれほど恐ろしいことをか、俺は良く知っている。それを危惧した部族の人達の判断は、決して間違っているとは言いつれない。一人の命と残りの部族全員の命。秤にかけるまでも無く、どちらをとるべきかは明白だろう。

でも。それでも。せめてあと少し、キャロちゃんが成長し、そして生きていけるだけの知識を得てからでも良かったのではないか。「いいんです。仕方のないことだったんです。族長さんも『すまない』って何度もあやまってくれました。ほかのみんなもです。ですからわたしは、村のひとたちをうらんでなんかいません」

言い切つて儂げに微笑むキャロちゃん。その気持ちを感じたのか、フリードが小さく鳴いた。

……この子は今六歳。あの時の俺よりもさらに幼いのに、こんなに気丈に振舞っている。それがなんだか、見ていられなかった。

あの時の俺には、手を差し伸べてくれた人がいた。その人のお陰で俺はこうして生きていられる。けれどキャロちゃんには、隣に立つてくれる人がいない。

もしもあの時、手が差し伸べられなかったら、俺は一体どうなっていただろう。そしてこのまま誰も手を差し伸べなかったら、キャロちゃんはどうなってしまうのか。

考えに考え、どうにか答えといえるようなものを導き出した俺は、フリードを降ろし、胸にぎゅっと抱きしめているキャロちゃんの頭に、そつと手を置いた。

「さかしき…さん？」

「リン、でいい」

「え？」

「俺のことはリンでいい。家賊がそう呼んでくれていた」

「で、でも、それなら…」

躊躇い、戸惑うキャラロちゃんの頭から手を離し、そっと差し伸べるようにしながら、小さく笑みを浮かべる。

「実を言つとさ、いきなりこんな知らない世界に連れて来られて、結構参ってるんだよね。特に、独りだつてというのが寂しい。寂寥感に押しつぶされそうさ。だからキャラロちゃん。こんなことを君みたいな小さい子に頼むのはとても恥ずかしいんだけど、それを忍んでお願いだ」

俺と家族になつてくれないか？

大きな衝撃を受けたような顔をしたキャラロちゃんは、続けて僅かに頬を紅潮させ、そして瞳に大粒の涙を堪えながら、それでもくしやくしやくに破顔し、

「はい！喜んでっ！」

差し出した俺の手を、しっかりと掴んでくれた。

よくよく考えてみれば、精神的なショックを少なからず受けていた女の子に、あんな感じで優しい言葉を掛けるというのは、ともしればいかがわしいものに聞こえてしまうかもしれない。はっきりさせておきたいのは、俺にはそんな考えはこれっぽいっつも無かったということだ。ただ、あの時の俺とさっきのキャラロちゃんの姿がどうにも重なつてしまい、黙っていられなくなったというだけのこと。さらに言えば、あの時俺に手を差し伸べてくれた人に対する恩を、同じように誰かに手を差し伸べることで返そうと思っているのかもしれない。

まあ、どちらにせよ。そのお陰でキャラロちゃんが多少なりとも救われたのなら、それでいい。

ちなみに、そのキャロちゃんといえば、

「くう……すう……」

おねむです。というか熟睡しています。どうやら前の晩はあまり眠れなかったらしく（そりやはそうだ。むしろぐっすり眠っていたら怖い）、あの後俺の手を握ってわんわん号泣してから眠ってしまったのだ。やはり疲れていたのだろう。頭上にあつた太陽が傾きやがて地平線に沈み、代わりにお月様が昇る頃になっても眠ったままだった。明日の朝までは起きないだろう。

ぱちぱちと火の中で爆ぜる木の枝を見ながら（火はフリードが吐いてくれた）胡坐を掻いた足を枕にして眠るキャロちゃんの髪を梳く。

「……………」

キャロちゃんの腕の中で同じように眠っているフリードをそつと取り出し、脚と入れ替えるようにキャロちゃんの枕代わりとする。そして出来るだけ音を立てないように立ち上がり、森の中を移動する。

「もういいだろ。出て来い」

少しだけ離れた辺りで立ち止まり、声を出す。おざなりな呼びかけだったにも拘らず、そいつ等は顔を出してくれた。

数は五人。どいつもこいつも厳つい顔をした男で、ニヤニヤと笑みを浮かべている。全員が銃を所持していた。

「ふむ、見た感じ、密猟者つてところか？」

「正解だ」

勘で言ってみると、五人のうちの一人が答える。やはり笑みは崩さない。むしろそれは深くなっていく。

「ここらへんの動物は中々に高値で売れるんでな。管理局の監視の目を掻い潜つてでも仕事をする価値がある」

「いや知らんよ」

勝手に説明をしてくれる男。言われなくても大体のことは察しが着くからいいよ。

「それで、お前さんは一体何の用だい？わざわざ一人でくるなんて」「何言つてんだ。用があるのはお前達の方だろう。しばらく前から俺たちの事を粘っこい視線で見てたくせによ」「

いや、正確には、キヤロちゃんを　だ。

「お前ら、動物だけじゃなく、人間も売ってるのか」

「たまにな。人間、特に綺麗な女は動物共なんかより遥かにいい値がつくからな。一度知ったら止められんよ」

ふーん、と生返事。

「成る程な。確かにキヤロちゃんは可愛い。あと何年かしたらもつと可愛くなるだろう。気分が悪くなるが、商品とするならば一級品だ。お前らはそれが欲しい。……それで？キヤロちゃんを搔つ攫おうとするのに邪魔な俺を、お前らはどうしたい？」

ガチャリ、と。外見の割には素早い滑らかな動作で、全員が銃を構えた。

標的は勿論、俺。

「……………くは」

いいね。いいよお前ら。分かりやすいし、話が早い。手っ取り早く済むならそれでいい。

「何笑つてやがる。言つとくが、脅しじゃねえぞ」

小さく笑い続けた俺を不審に思ったのか、先ほどから話しかけてきている男が銃を構えなおす。別に、そんな風には思っていないけど、すつつと両手を横に挙げる。さながら舞台俳優のように。しかし、ここにいるのは一人の殺人鬼。演じる事が出来るのは惨劇のみ。

それでもいいなら、始めよう。

「それじゃ、零崎スタートだ」

ぶち、と。大きいような小さいような。重いような軽いような。乾いているような水っぱいような。そんな音。

そして　ぼとり。地面に落ちたのは、まだ口が何かを喋った形

のまま固まっている男の首。一瞬遅れて、取り残された男の体から、面白いように血が噴き出した。

「う、うわああああ」

その光景を見て、腰を抜かしながら叫びかけた別の男の首が、また宙を舞う。その時点で残り三人となった男たちは、やったのが俺だと気付いたようだった。

俺の右手に握られているのは一本のバール。色が赤黒く、普通より長いという二点を除けば、何の変哲も無いただの工具に見える。

しかしその実、《刀鍛冶》十一代目古槍頭巾が鍛造を用いて作り上げた名品中の名品。例えば象が踏もうと曲がらないことは勿論、歪みもしないし凹みもない。

それに加え、『刀鍛冶』としての面目躍如。反りの小さい近い方を切っ先とし、一定の角度、一定の強さ、一定の速さで振るえば鉄さえも切断することが出来る。とはいえ、兄貴がもっている鋏とは比べるべくも無い。

三人目の胴体を斜めに切るとともに、残りの二人が銃口をこちらに向けて引き金に指をかけているのに気がつく。

くるり、と。手の中で得物を回転させ、九十度近くまで曲がつている方を先端にする。横に移動し、二人が一直線に重なる位置に止まり、全身を連動させて生み出した勢いのまま、武器を突き出した。僅かに掠っただけの銃が大破するだけの威力を向けられた人体は、先端がそのまま突き抜けようとするが、それよりも先に胴体が真ん中から千切れてしまう。一人を貫き、続けて二人目の胸へ食い込む。今度は千切れはしなかった。打撃力も中々ではあるが、兄貴の釘バットには遠く及ばない。さしずめ、鋏とバットのいいとこ獲りにして劣化品、といったところか。

どれだけ優れた性能であろうと、これが刀でないことには変わりが無い。故に古槍頭巾はこの作品に銘を付けなかった。だから、俺は自分自身の通り名である《読書中毒》シュリンクヘイトを、このバールにもつけている。

「…あれ？」

気がついたら全員殺してた。おお、考え事しながらでも案外いけるものだな。

にしても、さっきは危なかった。あのまま銃を撃たれてたら、銃声でキャロちゃんが起きるかもしれない。せつかく安心してぐっすり眠れてるんだから。

んー、でもどうしよう。辺り一面血の海だよ。ぶっちゃけ、殺すのより掃除する方が時間掛かりそう。放置してれば森の動物が片付けたりしてくれないかな？きつとしてくれるよね。

自己完結を済ませた俺は踵を返し、二、三度振って血払いをすませた《読書中毒》を袖から服の中に隠し、キャロちゃんたちのところへ歩き出した。返り血は一滴も浴びてないし、バレないだろ。

数歩歩いて、思いついたように指折り数える。

「五人だから…二年は平気かな？」

小さく肩をすくめ、歩くのを再開した。

キャロちゃんと会ってから、もう数週間が経過していた。

何事も無く、と言えるほど、順風満帆にはいかない事もあったが、それでも二人（と一匹）で何とかやっていった。

「ふ〜ん、ふ〜ん」

隣で手を繋ぎながら歩くキャロちゃんは鼻歌なんか歌ってご機嫌だ。理由としては、昨日偶然見つけた湖で水浴びをして体が綺麗になったことが有力視される。いくら小さいといっても、やはり女の子。体が汚れていくのには我慢できないらしい。

今度また、連れて行ってやるのかな、と考えていると、キャロちゃんがぴたりと足を止めた。

「ん？どうした」

「リンさん、あれ……」

指差される方に視線を向ける。そこには、人の手が入っていないこの森には似つかわしくない人工の建物、ぱつと見監視塔みたいな建造物があった。

何か知っているか、と隣に問いかける。

「多分ですけど……管理局のしせつではないでしょうか」

「……うへ」

管理局。正式には時空管理局。大層な名前の組織だと思うが、それに加えて主な活動内容が次元世界の管理とか。お疲れ様です。

キャロちゃんの説明を聞き、ようは警察の拡大版みたいなものと解釈したが、もともと警察が苦手な俺からしたらできるだけ避けたいところだった。

しかし……だ。

「なあ、キャロちゃん。もし俺たちがあの中に入って保護してください、って言ったたら、どうなると思う？」

「え？そ、そうですね……リンさんは『じげんひょうりゅうしゃ』」

ですし、私も希少技能を持っていますから、事情を話せば保護してくれるかもしれません」

「使えないけどな」

「う……そこをつかれると何もいいかせません」

気落ちして頭の上のフリードの慰められるキャロちゃんは一旦置いといて、ふむ、保護……か。それも手の一つではあると思う。俺自身、いつまでもこんな生活を続けていられるとも思わない。

キャロちゃんの事を考えれば尚のこと。ちゃんとした環境で教育を受けなければキャロちゃんの将来が危うくなるかもしれない。それだけはなんとしても避けたい。俺の家族になつたとはいえ、決して《一賊》になつた訳ではないのだ。出来るだけ普通の、異常に足を踏み込んだりしないような人生を送って貰いたい。

その為には、

「……大丈夫だ。いつか必ず、きちんと竜を使役できるようになるよ」

「本当に…そう思ってくれていますか？」

「勿論。俺は嘘は嫌いなんだ。というか、俺の家族ならそれくらい出来てくれないと」

ぐりぐりと頭を撫でながら言っていると、キャロちゃんは小さく笑った。それを見て自然に笑みがこぼれてくるのを感じながら、俺はしゃがんでできるだけだけキャロちゃんと目線を合わせる。何事かと首を傾げるキャロちゃんに、

「ゴメンよ」

顎への一撃。振動によって脳を揺さぶられた彼女はぐらりと揺らめき、地面にぶつかりそうになるのを支える。転がり落ちたフリードが威嚇の声をあげるが、これも一撃で気絶させる。一人と一匹を外套で包み、肩に背負い、反対側の手に《読書中毒》を握る。

ゆらり、と、管理局の施設を見据え、

「それじゃ、零崎スタートだ」

この時、殺人鬼によって気絶させられた少女　キャロ・ル・ルシエが次に目覚めたとき、彼女の傍には殺人鬼はいなかった。そのことに酷く動揺した彼女だったが、すぐに白衣を来た女性がその部屋にやってきたことにより一時的に落ち着いた（その時初めてそこが医務室だと気付いた）。

落ち着いて聞いて欲しい、と前置きされた女性の話を聞き、しかしキャロは大きく息を呑んだ。

十数時間前、というよりはもう昨日と言った方がいくらい前。

この施設に一人の男が乗り込んできたという。迎撃に出た局員達を悉く無力化し、施設のほとんどを制圧した時点で次元転送用ポート

をいどこかの世界へ行ってしまったらしい。自分は、その男が置いていったとも。

男は言った。この少女は故郷の村を追い出され森で迷っていたところを自分が見つけ拐かした。希少技能を持っていると聞いて期待したが、上手く扱えなくて残念だ。もういらぬから、そっちで好きにしてくれ、と。

話を聞き終わり黙り込んだキャラだったが、彼女を心配する女性にどうにか絞り出したような声で「一人にしてください」と頼んだ。女性は静かに頷き、部屋から出て行った。

彼女は掛けられていたシーツを握り締め、ぽろぽろと大粒の涙を流した。声も漏らさず、ただただ涙だけを流した。

そのときの彼女の心境は、彼女にしか分からない。彼女が明かそうとしない限り、誰にも分からない。

別れた殺人鬼と少女が再開するまで、しばし間が開く。二人の道が再び交わるのは、これより四年後。少女が『機動六課』というところで勤めている時のことである。

プロローグ（後書き）

次は一気に飛んで、Strikersの中間辺りになります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380z/>

魔法少女と殺人鬼

2011年12月18日02時53分発行